



[平成 30 年 12 月 12 日 定例会発表要旨]

クマ、観光素材になりえぬ！

手稲郷土史研究会 会員（相談役） 一ノ宮 博 昭

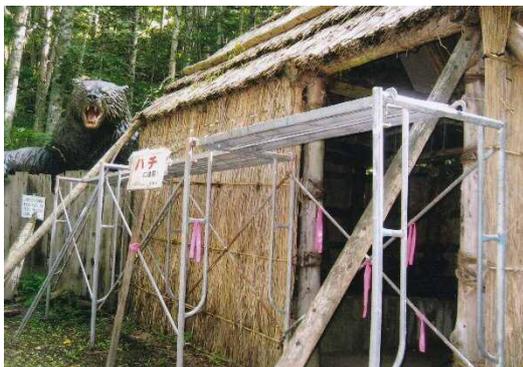
身の毛もよだつ地獄絵が展開されたのは大正 4 年。今から 104 年前。苫前村三毛別六線沢（現 苫前郡苫前町字三溪）の開拓農家を巨熊が襲った。道内最大、7 人の命を奪った。

第一幕は 12 月 9 日、裏山で磯舟用の木材を採取していた太田三郎（敬称略・以下同）方の寄宿人 長松要吉（59 歳・通称オド）が昼食を取ろうと帰宅したところ、囲炉裏の傍で預かり子 蓮見幹雄（6 歳）が横たわっていた。肩を揺すってびっくり。喉が噛み切れ、頭も割られてすでにこと切れていた。内縁の妻 阿部マユ（34 歳）もいない。小屋の周囲を見ると、クマの足跡としたり落ちた血痕が長く続いていた。オドはすぐさま近所に凶報を伝えた。午前中の出来事と推定された。即刻、討伐隊が結成され、マユの奪還作戦が展開される。巨熊は近くの山の大木の陰で マユを食いあさっていた。5 人が銃をかまえた。が、3 丁は不発で、1 丁は防寒具が引き金にかかって発射できず、1 発だけが発射された。巨熊は大声でマタギを威嚇、山深く逃走した。当時、ほとんど全戸に銃が備えられ、実弾を込めて発射するばかりになっていたのだが、農作業に追われるあまり点検もしておらず、緊迫した場面なのに用をなさなかった。



クマは獲物がある限り 何度でも同じ場所に現れるという。第二幕の 10 日夜も太田家だった。マユの遺体を取り戻したので、通夜が営まれた。参列者は 9 人だった。そこへ巨熊が飛び込んできた。小屋内は修羅場と化した。たき火は蹴散らかされ、棺はひっくりかえり、土間に遺体が転がった。あるものは柱をよじ登り、あるものは梁にしがみついた。土間に積み上げた穀物のカマスの陰にかくれたものもいた。運よく表に避難した人が空いた 1 斗缶を激しくたたくと、クマは森に逃走した。全員、腰を抜かすか、気絶寸前のものばかりだった。

そして、第三幕はまさに地獄絵だった。山に逃げたはずの巨熊が 太田家から 500m ほど離れた明景安太郎（40 歳）宅を襲った。明景宅は避難所に指定され、家族 6 人のほか、近所の斎藤石五郎（42 歳）一家の妻 タケ（34 歳）、三男 巖（6 歳）、四男 春義（3 歳）と、太田家のオドの 10 人がいた。



開拓小屋に飛び込もうとする巨熊
（三溪の事件現場に建つ復元模型）

突然、地響きのような得体の知れない物音と一緒に猛烈なうなり声を上げ、巨熊が明り取りの窓から飛び込んできた。クマは たき火を払いのけ、手当たり次第に鋭い爪でひっかきまわし、誰彼かまわず噛みついた。この乱行で、明景家の三男 金蔵（3 歳）を一撃でたたき殺し、斎藤家の春義、巖も打ち殺し、タケは爪で引き裂かれ死亡した。タケは臨月を迎えた身重で、嬰兒と共に死亡した。ほかの全員が重傷を負った。九死に一生を得た重傷者の話だと、タケは「わしはどうなってもかまわん。この子には手をかけるな」と二度絶叫したまま気絶した。

クマに通ずるはずもなかった。小屋の明かりはなく 真っ暗。狙撃するにもクマがどこにいるのかわからず、被害者のうめき声や熊の吐息、果てはカリカリという骨を噛み砕く音がもれた。いっそ、火をかけて小屋を燃やしてしまえ、残酷だが総攻撃すべきではないかなどの強硬論も出たが、ただ血にまみれた修羅場を見守るしかなかった。巨熊は夜陰にまぎれ小屋を出た。そこで討伐隊は一斉射撃した。が、クマは悠々走り去った。



事件を展示解説する郷土資料館

13日、またもや太田宅付近に現れたが、討伐隊の一斉射撃で退散した。その足跡をたどると、クマの足跡が千鳥足になっていた。被弾していることは間違いなかった。14日早朝、鬼鹿(現 留萌郡小平町)の老マタギ 山本兵吉(58歳)を隊長に決死隊7人を編成、追尾を開始した。20mまで近づき山本翁の銃が発射され、心臓を打ち抜いた。クマはうめき声を発しながら立ち上がった。そこに第2弾が発射され頭を貫通した。さすがの巨熊もどっと倒れ、絶命した。発生以来6日も経過していた。決死隊の大歓声があがった。銃座で顔をたたきつけるもの、踏みつけるもの、足蹴にするものなど悪行への報復が続いた。マタギが道路まで引き出し、馬籠に乗せた。が、これを引かせようとしたら、遺骸を見た馬が大暴れして手に負えなくなった。そこでマタギ全員が馬籠を引いて、三毛別青年会館まで運んだ。アイヌ伝説にクマを仕留めたら天候が荒れるといわれており、そのとおり大吹雪になった。

終幕。解体作業が始まった。部落民全員が作業を見守った。怒りと興奮の中での作業だったため、正確な記録が残されていなかった。わかっているのは、身の丈2.7m、体重380kgだけだ。胸部から背にかけ“けさがけ”という大白斑を交えた7、8歳の穴持たずの雄だった。肉は大鍋で煮て、住民が食べた。硬く噛み切れない肉だった。残りはマタギが分け合った。クマのイ(胆嚢)も頭も毛皮も誰かが持ち去って、今も保管しているのか否か、一切わかっていない。胃袋からは、食べられた子供の着衣が次々出てきた。山本翁は、「もし朱の脚絆が出てきたら、天塩の飯場で炊事婦が食い殺されているので、このクマの仕業だ」と証言した。証言どおり脚絆が出てきた。事件後4年を経て、後遺症で1人死亡しているので、計9人が犠牲となった大事件だった。

現在、惨劇の跡地には 掘っ建て小屋と巨熊の模型がある。これだけでもびっくりする。侵入経路の案内板もある。が、周辺の雑木のざわめき、クマやハチの出没注意の看板、クマに出っくわしたとき打ち鳴らす鐘まで用意されている。おまけにアブ、ブユの羽音を鳴らす群舞、なんとも背筋が寒くなる。車を帰路に向け、エンジンをかけたまま夢中でシャッターを切った。

抱腹絶倒のクマの話はいくつもある。だが、それは隔離された塀の向こう側の話であって、野生となると話は全く別だ。現に毎年のようにクマによる被害が相次いでいる。野生のクマを観光振興の材料にしたいかのような発想には、何としてもくみすることはできない。

次回予定⇒「縄文人の世界観」後藤崇和(手稲郷土史研究会 会員)／2月13日(水)18:15～／手稲区民センター視聴覚室



★「勝手にしゃべり合う会」へのお誘い 手稲にまつわるあれやこれやを自由に語り合ひましょう。1月25日(金)午後2時から「ていねコミュニティカフェ めりめろ」(手稲本町1条3丁目 メディカルスクエア手稲)で、本年一回目を開きます。飲料等をご注文のうえ、どうぞご参加ください。

★「新川」の記念誌が完成 新川流域を楽しくする会(事務局:手稲郷土史研究会内)による 北海道命名150年・新川開削130年記念の冊子が完成し、当研究会会員へも配付の予定です。お楽しみに!